

韓国の犁の形態と地域的特徴

金 光彦

1. 名称

「ジェンギ (犁)」の古語は武器を意味する「ジャムギ」である (この言葉は 19 世紀の中葉まで使用された)。『朝鮮王朝実録』にも「戦争に勝った後、敵国の宮闕をジェンギジル (ジェンギを使用) する」というくだりが何度も登場している。戦争が終わった後には武器を溶かして農具を作った。三国統一を成し遂げたシルラ (新羅) のムンム (文武) 王 (661~681 年) がのこした「兵仗器で農具を作れ (鑄兵戈為農器)」との遺詔がそのことを示す良い例である。北東部 (咸鏡道) 地方の別名である「ノンジェンギ」も、「農業を行うジェンギ」という意味であり、兵仗器と対をなす言葉である。「ジェンギ」が単に犁を意味するようになったのは 18 世紀以降のことである。

犁は最も重要な農具であった。若者たちは犁をうまく操ることができて初めて結婚することができ、作男に対する報酬もその腕前に応じて決められた。ジェンギは様々な道具の代名詞であった。木でできたものをジェンギ、石でできたものをトル (石) ジェンギ、鎌や斧のように刃が付いているものをナル (刃) ジェンギと呼んだ。今も漁師たちは海に網を下ろすときに「ジェンギを入れる」と言う表現を使っている。

ムダン (巫女) は、ジェンギを空の七星を与えて下さったものだと思っている。この「神霊な」器具で犯人を捜し出した。物を無くした時はジェンギを立てて黒豆を撒く。これで犯人の顔に黒い斑点が表れるというのである。ジェンギの 3 箇所 (牛の糞を塗りつけば 1 週間後には犯人が現れる) と考えていた。

家にある犁の数が、その家の経済力を測る物差しでもあった。犁を持っていない家が多かったと言うことの表れでもある。例えば、15 世紀中期の高級官僚であったハ・ウィジ (河緯地) の農場でも、ジェンギよりも小さい「タビ」と呼ばれる農具や鍬が使われていた。ジェンギを持たない人々は牛とともに人から借りて使用し、労働力をその代償として提供していた (ジェンギは 1 日分、牛は 3 日分の労働に換算された)。ジェンギを売って急場をしのぐための金を用意することもあった。

中東部 (江原道)・中部 (京畿道北部)・中西部 (黄海道) ではジェンギを「ヨンジャン」とも呼ぶ。本来は道具を指す名詞であるが、男性器の意味も持つ。「夫のヨンジャンが立派で妻が喜ぶ」という言い方がそれである。ジェンギの把手を「ジャブジョッ」 (手でとる男根の意)、二頭牽きのジェンギの犁轅の中央部分に差し込まれた短い棒を「ホラビジョッ」 (「ホラビ」は男やもめ、「ジョッ」は男根)、犁身の上端を「ジャブジ」、小さな男の子の性器を「ジャムジ」、ジェンギ自体を「ジャブンゴッ」と呼ぶのも、この流れである。犁を使って耕すと言う意味の「ジェンギジル」という言葉を「性行為」に、「種」という意味の「シ」を「精液」の意味になぞらえた朝鮮時代の歌も少なくない。犁身を「スッカラク (匙の意)」、犁へらから落ちる土を「パップ (飯の意)」と呼び、ジェンギで一日に耕す広さを耕作面積の単位 (ハルガリ・イトウルガリ) と表現したところにも、豊年を祈願する思いが込められている。

2. 名称による区分

次の表に示すように、犁の名称は67種に及んでいる。

名称	「ボ」類	「クツチェンイ」類	「ホルチェンイ」類	「ジェンギ」類	「カデギ」類	その他	計
数	14	12	10	8	5	18	67

(1) 「ボ」は「ボスプ（犁先）」を短縮化した言葉である。土地を耕すという重要な役割を果たしたことから名前がつけられた。中北部（黄海道・平安道）や東北部に分布し、中部（京畿道）および中東部の土地の荒れた平野部でも使用された。「ボを扱えてこそ真の農夫」という言葉もある。犁先（幅50cm）は大きく重く、土台となる木の右側に長めの耳（クイ）が付いているものもある（「クイボ」という別名もある）。この耳は耕土を遠くに放擲したり細かく砕く役割をする。轆の長さは250cm前後で、地形によって前の方に空けられた2・3個の穴で調節する。

「ボ」は2頭の牛で牽くようになっている。犁柱を轆の上に抜いて、犁身の上部の間に棒を挟んで力を受け止めるようにした。轆と犁柱が交差する上部にトッパン（犁評）を設けるのもこうした理由からである。一般的にジェンギ（17kg前後）よりもはるかに重く（30kg前後）、牛車に載せて運ぶ。中部以南で犁をジェンギと通称しているように、中・北部ではボ（またはボヨンジャン）を犁の代名詞のように使用している。

(2) クツチェンイは「クヌン（掻く）ジェンギ」を短縮した言葉である。「（ジェンギで耕した土地を）掻いてうねを作ったり畑の草取りをする」という意味である。「クツチェンイで地面を代掻きする」という言葉はこれを指している。中部（京畿道・忠清道）に分布し、一頭の牛で牽く。耕土が両側に落ちるためにじゃがいも畑などに適している。犁先の端は丸くなっており、犁へらはつけない。

(3) ホルチェンイは本来「ホルチジェンギ」であったと思われる。「剥がして掻き混ぜるジェンギ」という意味である。実際に、ホルチェンイはクツチェンイの別名でもある。中部以南（忠清道・慶尚道）に分布し、形態や機能においてはクツチェンイと差がない。甘藷などの農作物を収穫するのに使用される。

北・北東部で使用される「フチ」の語源も「ホルチ」であると思われる。（クツチェンイやホルチェンイと同様に）穀物に土盛りし、排水路を作る際にも使用される。17世紀末～18世紀初めの『山林経済』には胡犁として記述されており、18世紀末の『千一録』には漢字の音をあてて「後痔」と記されている。

(4) ジェンギは中部以南での通称である。

(5) カデギは東北部特有の起耕具である（図1）。犁へらがなくかわりに犁身の中ほどの左右に差し込まれた棒に長さ60～80cmのサル（棧・ブンサル）2～4本が差し込まれている。（これはボの耳を連想させる）ブンサルはうねを高く（30～40cm）盛り上げる他に、土を砕く役割も果たす。したがって、豆や麦を蒔いた後でさらに土を被せる必要がない。

人が牽く人力犁もあり、牛一頭牽きの独牛犁と二頭牽きの双牛犁がある。北部では双牛犁を多く使用している。中東部の山間地帯のカデギ（独牛犁および人力犁）には棧が付いていない。

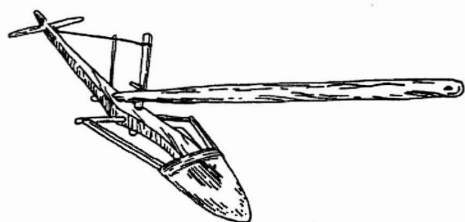


図1 棒と棧でへら替わりとしたカデギ
(チョン シギョン原図)

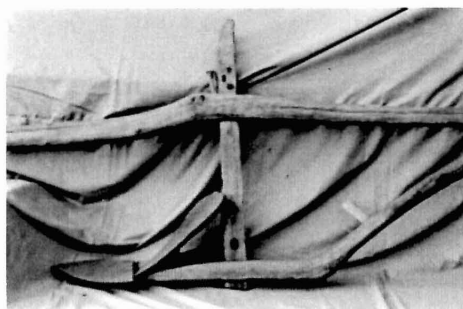


図2 長床犁
(金光彦 撮影)

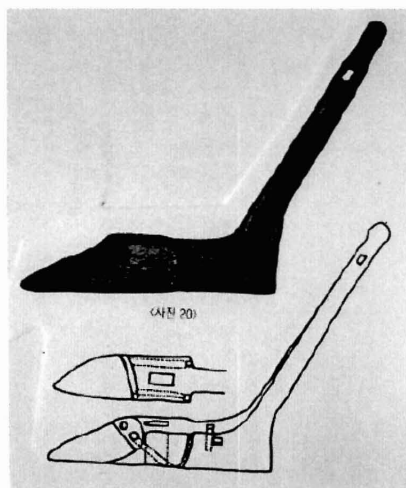


図3 平安北道出土の長床犁
(上図『朝鮮遺物図鑑古朝鮮・扶余・辰国篇』
(下図『韓国農機具図鑑』)



図4 無床犁
(金光彦 撮影)



図5 北に双牛犁、南に独牛犁
(チョン シギョン原図)

3. 形態による区分

犁身の形態によって長床犁類・無床犁類・短床犁類に分けられる。このうち長床犁類が最初に使用されたと見られる(図2)。犁床が広く平らな長床犁は水分の蒸発をある程度防ぎ、安全性も比較的高い。このうち犁へらのついたものは深耕が可能である。西部の平野地帯で使用された。

北部(平安北道鹽州郡倣義里)の泥炭層から、犁身と犁床が一体に削りだされた長床犁が出土した(図3)。犁身(長さ100cm)の上部に把手用の穴が、犁床(長さ80cm)の中心部に犁柱を打ち込んだ穴がある。犁床の前方にも犁先を固定するための二つの穴が見える。耕土は犁床の左側に耕転される。

犁身に轆を差し込む穴が見られないのは疑問であるが、二つの可能性が考えられる。一つは、中国東北部の犁丈のように、曲がった轆を犁身に差し込む方法である。犁床の後部の二つの穴と犁身から犁床に続く部位の外側が内側にすこし曲がっていることとも関係があると思われる。もう一つの可能性は、南部におけるように、犁身と轆との間にかすがいを打ちこんだり縄を巻いて固定する方法である。こうした点や、その大きさを考え合わせると人力犁であると思われる。北朝鮮では紀元前7～8世紀のものとされているが、三国時代(紀元後3～6世紀)の遺物である可能性もある。

無床犁は小さくて軽いために狭い土地でも自由に使用することができた(図4)。胴体と比べて犁先は大きい方である(長さ43~45cm、幅25~35cm)。地面に対する抵抗力が小さい反面、安定性が劣るために扱いは難しい。牛と人、さらに犁が一体とならなければならないからである。田うないや雑草の除去に使用する。山間地帯の傾斜地にある畑では耕土が自然に一方へと耕転されるために犁へらを付けない。北部山間・中部以南の田作地帯に分布し、人が牽くこともある。クッチェンイやホルチェンイは典型的な無床犁である。

短床犁は中部およびそれ以南の水田で多く使用された。犁へらがついており、轆は短く真っ直ぐな方である。犁先が小さく狭いために深耕が難しく、耕起できる面積も限られる。犁柱に深度を調節する装置がないことも欠点である。しかし操縦は容易である。20世紀初頭に日本から、いわゆる改良型が入ってきた(1935年に180,194台、1940年に344,836台)。犁先を鉄で連結し、犁柱を鉄にかえており、轆と犁身を鉄片で連結したものである。普及した当時は洋犁とも呼ばれたこの種類は全国に広がり、今日に至って主流の地位を確保している。

4. 牽引者を主体とする区分

犁を牽く主体によって家畜犁と人力犁とに分けられる。牛一頭で牽くものが「ホリ」(独牛犁)、二頭で左右から牽くものがギョリ(双牛犁)である。独牛犁は一日に600~700坪の田を10~13cmの深さで耕起することができる。犁先は短く細長い(京畿道は狭く小さい)。

双牛犁は中北部地域で使用される(図5)。(後ろから見たとき)力の強い牛を右側に、若い牛を内側に配する。耕土が内側に耕転されること、また、柔らかい土を踏まなければならないことから、右側の牛に負担がかかるのである。犁先は厚く長く、端は丸くなっている。轆の長さは1.5~2mで、左右両端に短い股木(長さ50cm)を差し込んで牛が外れないようにしている(内側は縄でこれにかえている)。中国西南部でのように、長い股木の両側についている縄を牛の鼻輪に結んで歩調を合わせる方法も使われる。一日に1200~1600坪の土地を13~20cmの深さで耕起することができる。

ギョリを使うためには他の家の協力が必要である。正月の前に親戚や近所の家と約束をする。こうした「ギョリ」が取り持つ親戚関係は長く続く。普段は労働力を分け合い、慶弔時にも助け合う。18世紀末の『課農小抄』に「牛3頭をつなぐ(連駕三牛)」との記述があるが、詳細については不明である。済州道では内地地方とは異なり弱い牛を前に、力の強い牛を後に縦列につなぐ。

人力犁(無床犁)は、牛の数の不足を補うために考え出された。15世紀中葉の『衿陽雜録』に「農家百戸のうち牛はわずか10戸にしかない。(中略)9人で犁を牽いても牛一頭に及ばない」と記述されている。ソウル近郊ですらそういう状況であり、山間僻地ではなおさらである。1845年には流行り病で全国の牛がほぼ全滅した。しかし牛が入れないような傾斜地やとうもろこし畑、あるいはうねが狭い畑などではむしろこちらの方が便利である。牽く方法は4種類である。

(1) 犁柱の下部に連結された縄を肩にかける方法、(2) 縄をチゲ(背負梯子)に結び付けてそれを背負って牽く方法(図6)、(3) 犁柱の上端に連結された縄を肩に結ぶ方法、(4) 轆の端の縄を肩に結ぶ方法などである。このほか、中東部の山間ではU字型の轆を使用する(双轆犁)。夫婦の場合は妻が前で牽き夫が後ろで操る。牽く方は力だけでよいが操縦には技術が必要だからである。人力犁は東北および中東部で多く使用される。



図6 人力犁をチゲ(背負梯子)で牽く
(金光彦 撮影)

5. 把手による区分

犁は、(1) 把手が特にないもの、(2) 一つあるもの、(3) 二つあるもの、(4) 四つあるものなど4つの類型がある。

(1) は犁身の上端をやや細くしただけのものである。これを左手で握り、右手に手綱を持って犁を操縦する。持ち上げて移動させたりする時は、中部以南の地方では犁身の間後部につけられた把手を掴んで動かす。クッチェンイはこの類型が多い。

(2) は犁身的一方(向かって左側)の穴に棒状把手(長さ50~60cm)をななめに挿し込む。しかし、主となる把手は前述のものと同様に犁身の上端であり、これは補助の役割を果たすに過ぎない。手綱の縄を巻いて握った右手で棒状把手を掴む。東北及び北西部(平安道西武)に分布し、中北部(江原道北部)でも見られる。

(3) には2種類がある。一つは犁身の中間の穴に30~40cmの横棒を挿して両手で掴むものである。クッチェンイ類によく見られる。もう一つは犁身の上端の中間に穴のあいた棒(長さ25~35cm)を打ち込んだものである。中部および中北部(京畿道・黄海道・平安道・江原道南部)に分布している。

(4) は把手を上下2箇所並べて差し込んだものである(この場合、下のもののほうが長い)。耕起の時には犁身の上部を、向かって右側の肩にあてて押してゆく。耕土を左側に耕転させるときには上の把手を右手で、下のものを左手で掴む。中南部(忠清北道・慶尙来た道)の山間部に分布している。

6. 犁先の角度調節法による区分

地面を耕起する深さを犁先の地面に対する角度で調節する方法は、(1) 特定の方法がないもの、(2) 轆に犁評を入れる方法、(3) 轆の上部に設けられている2、3箇所の穴にくさびを打ち込む方法の三つがある。

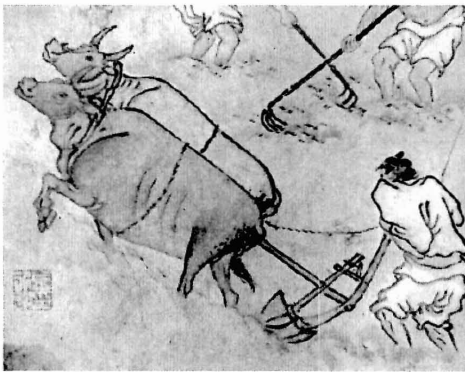
(1) は犁先の角度を手で調節する。深耕を行わないカデギやクッチェンイなどがほとんどでこの形である。これらは犁柱と轆が交差する上部に短い棒を打ち込んで轆が上向きになるのを防ぐ。

(2) は轆と犁身が交差する部分に、前が高く後ろが低い犁評を置く方法である。これを前に押せば深くなり、後ろに引けば低くなる。犁柱にくさびのための穴を2、3箇所設けておけば調節が容易になる。評は弱い轆を保護する役目も果たす。ボ類にこの形が多い。

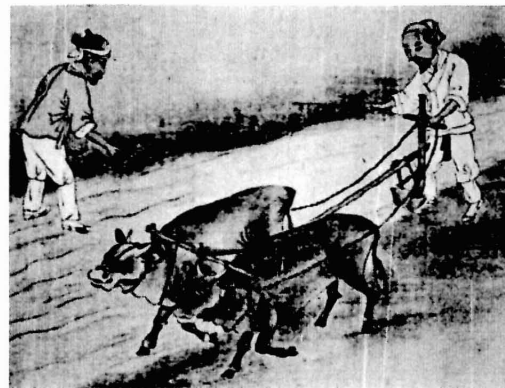
(3) は犁柱に空けた3、4箇所の穴を利用する方法である。深く耕起するには棒を一番上の穴に、浅く耕起するには下の穴に入れて犁先の角度を調節する。

7. 犁先の数による区分

キム・ホンド（金弘道・1745～？）やキム・ジュングン（金俊根・20世紀初）の風俗画には犁先が二つになっているジェンギが見られる（図7）。実物が伝わっていないことから、あまり多くは普及していなかったものと思われる。同じものが日本の福岡県にも分布しており、いくつかの改良品も生産された。犁床は向かって左側が右側よりも長い。左側の犁先でうねを作り、右側で田うないを行ったものと思われる。



（金弘道「檀園風俗図画帖」国立中央博物館）



（金俊根『金俊根風俗図帖』）

図7 犁先が2枚の犁

8. 南北の犁の形態的な違い

犁は北部のものの方がはるかに多様性を持っている（ほかの農具についても同様）。雑穀栽培であったこと、また、自然環境のためである（15世紀、北部において水田が最も多かった黄海道ですら全耕地面積の17%に過ぎなかった）。特に東北地方は年間の平均気温が8度前後で降雨量が700mmという自然条件のため、旱魃による被害や冷害が繰り返された。柄が長く刃が広いホミ（草刈などに使用されるもの）を使用したのもそのためである。歳時風俗もまた畑作を中心とする中部以北の端午文化圏と、水稻作が中心の中部以南の中秋文化圏に大別できる。

前述の理由よりもさらに大きな理由は、農家においてそれぞれが自前で犁を作り使用していたことにある。個性やこだわりが反映されたのである。15ほどある各部分の名称のうち10あまりは、限られた地域（郡程度）でのみ共通で、地域が変われば名称自体が違ってくるのも同様の脈絡からである（背負梯子をはじめとする10余種の重要な農機具に関しても同じような現象が見られる）。